

のもやはり潜在意識が猛然として迸出したのではありますまいか。

更に潜在意識の研究は醫學者の方から往々有力な報告が得られるのであります或る醫學者の報告によりますと吾々の心の奥即ち潜在界には恢復修理の元氣が旺盛なものであつて吾々が病氣にかゝり又はあるところを負傷をした時に實は醫者の藥といふものはほんの氣やすめにすぎぬもので多くは自然に内部から恢復修理せられてゆくのだ此作用に對して人々は「それは人間の生理的作用だ」といふかもしれないが我々の組織体を仔細に検査してみたならば是等種々なる病氣をなほす様に十分複雑に且つ普遍的にはできてゐないからこの作用は潜在界にある恢復修理の潛意識の作用に歸するより外に仕方がないと云つてゐます。私はこれに對してどうとも云ひ得ませんが或はそういふものかもしれません。

以上心理的又は宗教的神秘的方面から潜在意識といふものがどんな風ていはれてゐるかといふことを少し許り御紹介致しました。尙ほこの外この問題につきましては色々な議論もありませうけれども今こゝに多くを云ひ得ませんが要するに今日におきましては科學的に結論を下すことはできません。

なほ最後は一言附け加へて置きたいとがあります。前の如く申してきますれば潜在意識の働は實に廣大なものであると思ひます。併しながら明に意識に上らぬ事でありますからこれに就いて何人

にも納得させる様に證明することは出来ません。従つて人々がコウダラウと推定する丈で要するに想像的の解釋である。それ故に普通の心理學や倫理學上の道理を潜在意識に關する推測で無にする様なことは元より正しいことではありません。私共の態度としては飽く迄も今日の學術上の研究を尊重しこれを補ふる間に潜在意識を借りて説明すべき様の場合もあるといふ丈であります。(完)

●民間年中行事由來

序 説

文科四年

堤 淺 廣
田 間
房 野
は 野
で

年中行事の由來に就きては異説多し。かくの如き事は固より故實家の研究を待つべきものにして、我等の徒の到底究め得る所に非るなり。されば茲には單に常識的方面より諸姉の御參考にもと思ひ次の民間年中行事の主なるもの

一月 年始祝雜(注連繩。門松。屠蘇。鏡餅。萬歳)七種粥。十日夷子。藏開き。左義長(爆竹)十五日粥。

二月 彼岸。初午。涅槃會。

三月 上巳。雛祭。

四月 灌佛。
五月 端午。
七月 七夕。孟蘭盆。
八月 八朔。名月。
十月 亥の子。
十一月 冬至。
十二月 煤拂。追儺。
に就き極めて難駁なれども數種の書を参照してとり纏めたるのみ。僅少の時間に於てしたる事なれば粗漏亦多し御許を乞ふ。

(一)

年始祝雜

注連繩

新年に注連繩を神前又は門戸に張ることは遠く神代に始まれり。藁にて絢ふ。米穀は命を繫ぐ至寶にして神明之を賞美し給ふによれりといふ。

その起源は天照大神岩戸に隠れ給ひし時、手力雄神大神を引き出しまつりて中臣神忌部神尻久米繩を其の後に引き渡し此より内にな返り入り給ひそと申せりと古傳に見ゆ。また貞丈雜記に「藁にて左繩に絢ふなり。絢ひながら所々に三五七の藁を下げ、繩の兩端をば切り揃へすそのまゝにて直なる姿なり。南總地方にては平日も猶之を張る。尻久米とはしりは本の意にてくめは籠めなり。繩を引きはへて其處を指し示し入れしめぬ標なり。」と、神前門前神木舟車石などにもせり。地方によりては墓前にもせり。

門 松

新年に家々の門前に松を樹て飾りて祝ふもの俗に松かざりといふ。竹を添へしめ繩輪かざりを添ふ。我國古來の舊習にして他國にはなきところなり。その起源につきては異説ありて一定せず。物に見えたるは本朝無題詩惟宗孝言の詩の自註に「近來世俗皆以松挿門戸而余以神代之」とあるを始めとすべし。此外年中行事繪に土佐光長が筆にあらはれ、又歌には堀河院百首顯季卿除夜の歌に「門松をいとなみたつる云々」と見えたり。もと門松は民間の習にて朝家の公事にいでざるにや。正しき書ごもには見えず。竹を添ふことはいつの頃よりか明ならされども、應永の頃には添へたるものならんといふ。世諺問答に「松は千歳を契り、竹は萬代を限る。草木なれば年の始の祝事にたて得らるべし」と見ゆ。

歳暮にこれをたて正月七日に之を撤するを以て元日よりこの日までを松の内といふ。或は十五日

まで存するものあり。

屠蘇

屠蘇は正月の始に用ふ。内々行事に「二袋紅の切にて五寸ほごに鱗形にして柳の枝に絲にてつくるとぞ。和漢三方圖繪に云『造法用赤木桂心防風菝葜蜀椒桔梗大黃烏頭赤小豆以三角縫囊盛之除夜懸井底元旦取出置酒中煎數沸舉家東向從少至長次第飲之藥滓還投井中歲飲此水一世無病』韻語陽春云「屠蘇必取幼飲何也曰少者得歲故先老者失歲故後天子元旦四方拜後有御齒固之供而典藥頭獻屠蘇白散」中略嵯峨弘仁中始行之今至士庶人亦用之所謂白散白求桔梗細辛散藥也酒はさかえの義吞めば笑ひさかえ樂むゆゑなり」といへり。

鏡餅

本邦食鑑云「本邦自古以餅爲神明之供而作大圓塊以擬鏡形故呼餅稱鏡此擬八咫鏡乎正月朔旦必以鏡餅供于諸神及一家團圓薦鏡餅以賀新歲凡用鏡餅祝賀儀以二箇相重號一重此偉奇用偶者乎」と、成形圖説云「歳首に餅を製て鏡餅と稱すること日神磐戸にこもらせおはしけるとき其御象鏡に鑄奉して祈り申しけるに、再び磐戸あけさせ給ひし例によりて、新玉の年たちかへる春の初めをかの常闇より又しもうつに開け明ぬる嘉慶になんたぐへつ祝ひける」とあり。

萬歳

年の始めに家々をまはりて新年の賀詞を述べ家門の繁榮を祝ふとて烏帽子素襖の装束にて、二人或は三四人扇を開きて祝詞を謳ひ、一人は鼓をうつてこれと和して舞ふものなり。貞丈雜記に曰く「萬歳とて烏帽子素襖着て年の始に人の家に來りて祝文をうたふもの古よりあり。(中略)古は千秋萬歳といひけるを、後世は略して萬歳とばかりいふなり。萬歳のうたひものの調に千秋萬歳といふ事ありし故かくの如く名づけたり」と。その起りは昔踏歌の節會(正月十五日男踏歌十六日女踏歌)に京中の男女、祝詞をうたひて歌舞せし餘風なりといふ。踏歌の舞人萬歳樂を奏せし故に、今もその名残れりとぞ。一説に曰く「六十六代一條院の朝長徳の頃大江定基參河守に任せられしが彼は博議宏才にして佛道にも疎からず、我領分の百姓に教へ、佛教傳來の因縁を述べて刈谷の郷の吉郎大夫とといふものに與へて、年の始めに舞はせ以て世累を忘るゝ媒とせしめたり。是れ萬歳の始にして今以て三河國より來る」と、今關東に出づるを三河萬歳といひ、關西へは大和美濃邊より多くいづ。

七種粥

正月七日に七種の粥をいはふ事は都鄙ともにあるわざなり。そは疾病を免るゝ故なりと傳ふ。我國にて七種の粥をはじめて禁中に奉りしは延喜の御代にはじまり、以外民間にも行れたりといふこれは梁の宗懐の荆楚歳時記に「正月七日俗以七種菜爲羹」といへる文ありしに基くといふ。此の七種は唐土の人と雖、後世にいたりては知るものなきによりて本邦にては季冬より初春にかけて生ひい

づる種々の菜を以てその數に合せたるものなれば、その説まらちなれど七種の歌にいふ「芹なつな御形はこべらほどけの座すすなすしろ是ぞ七くさ」と。

なづな(葉はたんぽうに似て岐あり三味線草べんべん草の名もあり)

御形(ははこ草)

はこべら(春夏最も繁る莖方にして地に敷くこと蔓の如し。春の初め白花簇り開く。)

佛の座(おほばこ)

すすな(かぶらな)

すすしろ(大根)

然れども今世民間にては青菜と薺とを交へ用ふるのみ。六日夜この菜を組の上にのせ、庖丁にて打はやす。その祝詞に「唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬさきに、なづな七種はやしてほとほと」、又所により「唐土の鳥の日本の土地へ渡らぬさきに」といふ。此事、事文類聚に荆楚歲時記を引きて曰「正月七日多鬼車鳥渡家々槌門打戸滅燈燭禳之和俗七種菜をうつ唱に唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬさき」といへるは、此鬼車鳥を忌む意也。板を打ちならすは鬼車鳥の不止やうに禳ふ也」と、又或書に曰「彼の鳥夜中に飛行すと曰へる故に六日の夜より七日の朝まで七草をうつなり」七草雙紙に「七草を柳木の盤に載せて玉椿の枝にて六日の酉のときは片をうち、戌の時になづな、亥の時にこまやう、

子の時にはこべら、丑の時に佛の座、寅の時にすすな、卯の時にすすしろをうちて辰の時に七草を合せて、東の方より岩井の水をむすびあげて若水となづけ、此の水にてはくが鳥のあたらぬさきに服するならば、一時に十年づゝの齡を経かへり、七時には七十年の年を忽に若くなる。はくが鳥とは鬼車鳥のことなり」とはくが鳥の事はいふにも足らぬ作りごとなれど、今も六日の夜は各地に行はるゝことなり。

十日夷子

一月十日に十日夷子とて社に詣て、福を祈るもの多く、家々にも神棚に鹽鯛を供へ、各自膳にも上して祝となす例なり。取分け大阪今宮の夷子は流石に商業地に於ける福の神とてこの日の賑ひ殊に盛にして、社前には大福帳を鬻ぐ、店多くいづるも土地柄なればなり。何時の程よりの慣習にや、この神、豊なりと傳へられて詣づる人は皆手に手に木槌を持ちて祠後の羽目板を打ち、參拜のしるしとする事例となすぞ。

藏 開

正月に藏の神に臚餅を供へ、戸をひらくことなし。十一日に至りて始めて戸を開き、餅を祝ふ。藏の神は稻倉魂神を祀る。雜談抄に曰「和俗年の始めに藏を開て、蓄積の金銀米錢にかぎらず、一切の財貨を取り出して用にあて、賣買のことを調ふ。尤其の年始なれば吉日を撰びて庫藏を開くを

いふなり」とあり。これによれば日はいつと定らざるが如きも十一日を以て藏開きとせしことは、徳川氏の時代に諸大名の家にてこの日に米廩を始めて開きしより遂に一の式となり、正月十一日錢開きと同日にすることにせり。

左義長

左義長又は三毬打の字を用ふ。左義長は葉竹にしめ縄扇などを飾りたるものを爆して病魔を畏懼せしむるに起因すといふ。民間にては十四日夕、又は十五日の曉に廢撤せし所の門松しめ縄飾等をあつめ葉竹を其四方にたて、之を焼く。

十五日粥

正月十五日は小正月と稱して小豆粥を祝ふは東西に通じての風習なり。昔はこの日小豆粥を煮て天狗祭といふ事をなしたり。この小豆粥の中へ餅を入れて食ふ。是を粥柱といふ。又福沸といふ。此粥を糊として牛王神札を貼る。皆疫を避る法なり。此の粥を入るゝこと古きことにや枕草子に「十五日もちがゆのせちまゐる」と見えたり。下野國にて漆膠木を尺許に切り半は皮を去り其所を木口より四つに割り、小豆粥の内へさし入れて粥のつきたるを門戸にかざる。これを粥箸といふ。その謂は人の國の昔黄帝蚩尤を正月十五日に平げ給ひしに魂は天狗となり、身は蛇靈となり、人民をなやましければ黄帝天に祈りしかば天つげて曰く「魂魄をば祟め身幣をば滅せよ」とありしによりて

月毎にその幣をたてまつり給ひき。これによりて今代に至るまで正月十五日の亥の時、小豆粥を煮て庭中に天狗を祭りつゝ東に向ひ再拜してひざまづきて之を食すれば、年中の疫氣を除くゝ傳へらる。我國にては寛平のころより初まりしかや。

(二)

彼岸

彼岸は毎年二月八月の二季晝夜平分の時を以て、法會を營む例にして其の緣由は詳ならず。或はいふ、延暦二十五年三月十七日の官符を以て崇道天皇の爲、國分寺の僧をして春秋二仲の日金剛般若波羅密多教を讀ましめしに濫觴すと。此の説或は然らむ。波羅密多是到彼岸の義にして即轉迷開悟を調ふ。寺院に於て法會を營むのみならず、民家にありても或は佛事を營み、祖先の冥福を祈る等の事あり。日記紀事に「凡京師俗彼岸中偶逢親戚之忌日則供菓茶而祭之以其祭餘之菓互相贈或諸親戚朋友而饗茶菓云云」と普通民間に於ては團子を作りて互に相贈答する事あり。善庵隨筆に云「春秋の二分は、日正東に出で、正西に没する故に天笠の俗これを時正といふ由なれども、此の時に彼岸會を修することは佛經に所見なし(中略)十六觀經の日想觀の文に「正坐向日諦觀於日專想不移見日欲沒狀如懸鼓」などありて、日想觀は必ずしも時正に限ることはあらざれども、淨家にて時正は日正東に出でて正西に没すれば日想觀の時節とせるより其の徒の此の時に乗じて一七日の法筵を開

き談義說法し没日を觀念するより、西方淨土を識知せしむるの因を以て彼岸會とは名づけたなり」この彼岸會を曆に載することは昔時談義說法は比叡の阪本に限り、廿一ヶ所の談義所ありて都鄙の男女こゝに集れり。されど彼岸の時節を辨知せずして迷惑せし故に叡山より曆家に請ひて曆本に書きのせしより、いつしか時候の様になれりといふ。

初 午

二月初午には稻荷祭を行ふ。初午の日を又は祭午ともいふ。平安時代より盛なる神事の一なりしが何時の頃よりか二の午、三の午とて二月中の午の日を三度まで祭とする風起りぬ。稻荷本社は山城の國伏見の稻荷なり。稻倉穗社（二名保倉神）を祀れり。神代記にいなりは保倉神の腹中生稻と見えて稻生の義なり。稻荷とかくを見れば之はいなといひしなるべし。即ち五穀の神なり。この日家々には赤飯を炊ぐを例とす。

涅槃會

毎年二月十五日諸寺涅槃會とて釋迦入滅の法會を修し涅槃像の圖を懸けて衆人に拜せしむ。日次紀事「佛滅日（二月十五日）洛内外諸事掲涅槃像各修法事民間舊蠟所造之餅花再熟之供佛」とあり。隨意錄に「釋迦之死稱涅槃梵語釋曰示寂釋氏之說云佛之死示寂而已非眞死也今謂其死非眞死也則其生亦以爲非眞生斯其不生不死畢竟空之說與莊周冥死生以爲虛無其見全同焉耳」とあり。

(三)

上 巳

三月三日は上巳と稱す。支那にては初め三月第一日の巳の日を以てせしが、曹魏の時より三日を用ひ觴を流上に流し、不祥を祓除し仍は上巳と稱せり。我が朝廷に於ても昔より之に倣ひ水邊に宴を設け、此を曲水の宴といふ。後世に至りこの儀は已みたり。三月三日は重三ともいひ、又桃の盛りなるが故に桃の節句ともいひ、又此の日一般に雛祭をなすが故に雛の節句ともいふ。

雛 祭

古今要覽云「雛遊は其の始め定かならず。崇神天皇の御時和珥坂の少女の歌に、「比賣阿素媛^{ひめあそひすめ}殊望^{すけぞ}」とあるを私記に、「今按するにひなをそびなり」といへり。弘仁私記か公望私記かしらずと雖、公望承平六年十二月八日宣陽殿東廂に於て日本記を講ずいへば其の頃の私記ならむ、さればたとひ崇神天皇の御時よりといふ事は疑はしと雖、承平の前より行はれしことは疑なかるべし。されども時節は定らざりしを今の如くに三月上巳となすに至りしは何時の頃よりか、比那問答に云、「女子の雛を弄ぶ事古きとなり。ひな遊の事源氏物語の所々に見えたり。是は常に女のもてあそぶものなり。三月三日に今世ひなをたつるは巳の日のほらへのなで物より始りたる事なるべし。三月上巳の日に古くはほらへをしたり。ほらへは身の災をほらふなり。此のほらへをするに陰陽師のもとよ

り紙の人かたを送るをその人かたにて身をなで、陰陽師につかはせばそれにてはらへを行ふなり。人かたは我が身代りになるなり、さればその人かたをかたしろともいふ、又なで物ともいふ、源氏物語やごり木の巻の歌に「見し人のかたしろならば身に添へて戀し瀬々のなで物にせむ」とよめるにても知るべし。古はかの人かたを陰陽師に返したるを後代にはらへの具にはせず棚にならべおきて酒食を備へてもあそびものごせり。是の巳の日はらへの具の人かたと昔女子の常のたはぶれのひな遊びと一つにまじりあひしなるべし」と。今も世に紙ひなは雛の本式なりといひつたへたるはかの巳の日はらへの残りの人かたより來りしものならむ。上の巳の日はらへは男女ともになせしがあそび事になりし故女子のみのこと、なりぬ。合せ考ふるに天正以後の事なるべし。

雛の供物は膳部の外に煎豆、煎米、白酒、菱餅、蛤、挑の酒などあり。

雛の調度は内裏にて用ふるほどの品は皆小さに作り、今は塗物、蒔繪などにて美しく作る風なり。近古までは調度質素なりしが近年にいたりて金銀を鏤めなどするに至れり。昔は蛤貝なりき今も古風なる蛤貝を用ふ。

(附)桃酒。世諺問答に云ふ、「三月三日に桃花の酒をのみ侍るは何の謂れぞや。答、人の國の事いや太康(西晋武帝の年號)年中に山民建山自然武陵といふところにいたりて桃花の水にながれしをのみしより氣力盛になりしかば、命三百餘歳におよべり。されば今の世に桃の花をもち

ひ侍るとかや、酒をのみことは周の曲水の宴に盃を流せしよりや初まりけん。

(四)

灌佛

毎年四月八日は灌佛會とて各寺院にては花御堂を作り釋尊の像に甘茶を灌ぐを例とす。この式は釋迦が俱毘羅城にて生れし時天龍降りて水を浴せ奉りしに倣へるものなりといふ。この事推古天皇の十四年より始りしもの、如し。灌佛會或は佛生會といひ、又は龍華會ともいふ。近畿地方にては此の日竿頭に躑躅の花を結び付けて屋上に立つ。或は一竿或は二三竿を繼ぎ甚だ高くするもあり。釋尊に供ふる心なるべし。

(五)

端午

端午とは五月五日即初五の義にて五と午と相通じたるものなり。又重五ともいひて、古來五節の一とし男兒の佳節として其の立身榮達を祝する習ひとす。當日菖蒲を以て節物となし家々の軒に菖蒲、蓬をふき菖蒲湯、菖蒲酒、粽、柏餅、旗幟、胄人形等を作り以て祝ふ。軒に菖蒲をふく事は中古よりはじまれり。國史記等には記されれば定れる恒例にはあらざるなり。されど五月四日夜主殿寮内裏含茸菖蒲と西宮記に見えたれば藤原氏時代のはじめ頃より定例となりしにや。枕草子には「せ

ちは五日に先ちてはなし、さうぶよむぎの香り合ひたるもいみじうをかし。九重の内をはじめていひしらぬ民のすみかまでいかでわがもとにしげくふかんとふきわたしたる猶いとめづらし云々。」とあり。凡菖蒲をふくことは火災を除く爲にして家の飾りには非ず。故に諒闇喪家にても憚らずこれをなす。

菖蒲酒は菖蒲の根の、一寸に九節のものを取りて細に切り、縷の如くになして酒に泛べて五月五日に飲むは、瘟氣或は蛇蟲の毒を避くるよし和漢の書に見ゆ。又菖蒲の花を酒に浸して端午に用ふる事あり。公事根源に云ふ「五月五日節會天皇武德殿に出御なりて宴會を行はれ、群臣に酒を賜ふ。」と女房私記に云ふ「五日あやめの御祝、初献ちまき、二献御ひら、三献くだもの、御盃出づ御銚子出づ。三献めにおてうしの中に菖蒲の根を入れ御はいせんひとへ衣にて云々」とあり。

菖蒲湯とて菖蒲の根をきざみ湯に入れて沐浴すること世諺問答に見え、また「五月五日菖蒲の湯御行れあり」と殿中御對面記にも見えたり。

胄人形は古への胄花より起れり。胄花は紙をもて胄をつくり、其の上さま／＼の花をかたどり或は紙にて人形をつくり据ゑなごして童のもとあそびにしたるなり。胄人形といふ名目はもと胄の上に人形ばかりつくりするたる故にしか云ひしを後に胄と人形と別になりて人形ばかりをも胄人形といひ略して胄をばかりをもいふにいたれり。即胄人形は胄の花の遺制なること疑なからん。

この日兵器を以て祝となすことは光仁天皇の天應五年唐人襲ひ來りしとき早良太子征討の命を蒙り藤杜神社（山城國深草里にあり）に詣で、五月五日兵を調へて發したまひしが唐人敗れければ後世之を祝して其の出陣の形を象るなりといふ傳説あり。

粽は惡魔に象りたるものにてこれを切りて食するは惡鬼を降伏するの義なりともいひ、又昔楚の屈原が五月五日に汨羅に投じて死し、其の姉女姿が粽を作りて屈原を吊ひたる故事によるともいふ。柏餅は改正月令博物笈に云ふ「むかしあふちの葉につゝめり。柏も神道に用ふるめでたきものなれば用ゆるなるべし。すべてけふのかざりもの毒邪を拂ふためなり。夏は毒虫多く人の家にも入り來るにより、粽は虵の形に表はす。是を食すれば彼を降伏する心にて夏の中わざはひなき事を表して祝するなるべし」といふ。

(六)

七夕

七月七日は古來七夕と稱す。七夕は古くはたなばたといふ。棚機即織女の省言なり。支那の俗説にいふ、此の夜牽牛織女の二星相遇ふ、烏鵲天の川に來り翼をのべ橋となして織女をわたす。この星に機織るわざをはじめ手巧を祈り乞へば其の願を得といふ。今大抵葉竹を樹て色紙短冊等を附け供御をこゝのへて庭上におく。これ皆支那より傳はりしことなり。

孟蘭盆

孟蘭盆は梵語なり。倒懸救器と翻譯す、倒懸はさかさまにかくるといふ心なり。略して盆といふこの事目蓮の故事に基く。

菩提心集に云ふ「問。人の子なき親の爲めに七月十五日盆供といふ事するはいかなる事ぞ。答。蓮尊者の始めて得道の聖と成りて失せにし母の在り處を求むるに、餓鬼の中に生れつゝ飢せまり骨皮のかざりにて居たるを見て鉢に食ひ物を盛りて食せ給ふ。彼取りて食はんとする時に左の手を打ちおほひて右の手して飯をつかみて口によする程に火になりて燃えあがりぬ。目蓮尊者悲しみて釋尊に申したまひければ、釋尊のたまふやう、七月十五日は僧自恣する日なり。其の日百味食ひ物を鉢に盛りて衆僧に供養せば母の苦しみを救ひてん、と仰せらる、目蓮そのまゝにして母の患を救ひたり。其の事にならひて今の世にもするなり。」と。

推古天皇の十四年に齋を設けしを初見とす。今民間にては祖先の魂を迎へて供物を獻じ、僧侶は棚經と稱して家々に就きて續經す。又この日盆躍りをなすの俗あり。

(附)七月十五日を中元といふは、隨意錄に、「正月十五日を上元といひ、七月十五日を中元と曰ひ、十月十五日を下元と曰ふ。此の三日を以て神靈人間に下り罪禍を校定すといふ。而して中元を以て祖先を祭るは右に述べし故事に基く。

(七)

八 朔

八月一日これを八朔といふ世俗の風儀なり。昔は此の日物品を贈答して其の日を祝したるためにして、一にたのみの節といふ。たのみは田の實にて米を折敷(盆の類)などに入れて人の許へつかはしけるとか、建長のころよりはじまれりといふ。

名 月

八月十五夜の月を賞することは、支那人に倣ひしものにて、寛平延喜の頃より上流の人々之を以て高興となし宴を設け詩歌を賦すること漸く盛にして後世に至る迄衰へず。而して民間にては芋團子等を月に供ふるを例とす。八月十五夜を中秋といふは秋九十日の最中なる故なり三五夜月見などともいふ。

九月十三夜の月を賞することも、延喜時代より起り爾後八月十五夜と相對し並にその夜を賞し以て明月の夜とす。この夜は團子を製することなく、枝豆をゆでゝ之を食ふ。故に十三夜の月を豆名月又は栗名月などいふなるべし。

(八)

亥の子

十月の上の亥の日饅を製して祝ふ事あり。この餅を亥子餅といふ。昔は餅を冢子の形に作るといひ、又大豆小豆大角豆胡麻栗柿糖等七種の粉を合せて作るなど見えたり。此の儀唐土にても上古よ

りありたり。

是の意は人をして病なからしむる故なりとも、又一説には家は能く多子を生む故婦人之を羨みて此の日に至りて餅を供へて神を祀りしなりと傳へらる。この事何時の比より初ることも見えざれど、延喜式にのせたれば往古より有し事なるべし。承安四年に沙汰ありて大外記頼重師尙など勘文を參らす、夫れも本朝の起りをば確には言はず皆本書本説をのせたり。子夜行といふ文には、「十月亥の月にして亥の用ゐらるゝ事は子を一年の月の數生み閏るは十三うみてめでたくあましまでいみじきものなれば」とこの事行はるゝよし侍る。唐にても久しくなし傳へたりや計りがたし。」と記せり。

(九)

冬至

冬至は陰陽交互の季にして、乃ち陰極はまりて陽に復するの時季なり。而して冬至は陰曆を以てすれば節十一の月中にあれども、陽曆なれば大抵十二月の交にあり。冬至には饅を製して先祖考妣に獻し又奴婢に與へ共に之を賀するを風とす。蓋し是日陰極の至にして陽始めて至るの時なれば一日は安靜默座を法とし、奴婢の如きも勤勞せしむるを否とす。今日後十日夫婦も衾を同じくすべからずと當時のものに記せり。扶桑歲時記に「冬至は十一月の中なり。三至とて一には陰極の至、二には陽氣始めて至三には日行南に至る。此故に至日ともいふ。冬至の前一日に至りて陰氣長ずる事

極り、日の短き至りなり。又夜長き事も極れり。日の南に至るも極れり。今日一陽來復して後陽氣日々に長じ日も漸く長くなる。陽氣の始めて生ずる時なれば勞働すべからず。安靜にして微陽を養ふべし。閉戸默座して公事にあらずんば出行すべからず。又奴僕を勞働せしむる事なかれ。」と。

(十)

煤拂

十二月の十日過ぎよりは何れの地も迎春の準備に忙はし。十三日に戸々煤拂ひとて一年の大掃除を行ひ、古き神札は皆是日に納めて新しき神棚の準備をなす。地方によりては十四日若しくは十五日を其の期とする所尠からず。

追儼

鬼やらひの事にて、十二月晦日に之を行ふ。追儼の儼は難なり。大寒の陰氣災難をなし、厲鬼これによりて人をなやますによりて、この難鬼を追ひ拂ひ以て年中の疫を追ひ拂ふ式なり。各戸柵の葉豆穀赤鯛の頭を戸外に挿み、家人「鬼は外福は内」と呼びつゝ、熬大豆を室内に撒す。是邪鬼を去りて青陽を迎ふの意なり。豆を撒する者を年男といふ。節季に當りて米錢を乞はんと市中に來る物貰あり「疫拂ひませう疫拂ひませう」と呼びつゝ市を廻り家に入りて踊をなす。來る年の福と又年の終まで何事もなく送り重ねしを祝ふ心なるべし。此の式は文武天皇の慶雲三年十二月宮中にて行はれ

しに始まる此の年天下百姓多く疫癘になやまされし故なり。(完)

三十

◎我が國戰國時代の女性

文科三年 内田 清

この話を致します前に大鉢戰國時代とは何時頃をさすかを定めたいと思ひます。これは人々によりまして色々に定められて居りますがここでは足利織田豊臣の時代を漠然と戰國時代と致して置きます。

この時代に於ける社會の狀態は如何であつたかと申しますと、よく言はれて居ります通り麻の亂るゝやうで京都の荒廢も愈々甚しく畏多いとであります。皇室の式微はその極でありました。又一方地方の様は如何と見るに内亂が常に絶えませんでした。それ故此の時代には文學に於ても道德に於ても一般に振はずして文學史上倫理史上の暗黒時代といはれて居ります。しかし亂世には新英雄が嶄然として其の頭角をあらはすもので支那戰國時代と同様にこの時代にも新英雄があらはれました。そしてそれは多く微賤なる者の中から出ました。秀吉の如く早雲の如く。

扱此時代を一貫して居た思潮の一は下剋上といふ事であります。群書類從に建武中興頃の落首が載せてありますが既にその中に下剋上といふことが歌つてあります。これが足利十五代を通じての思

想界の潮流をなして居ります。之は門閥と實力との競争の結果のやうに思はれます。以前には御承知の通り門閥が重んぜられ建武の中興の時にも尊氏が忠臣正成よりも義貞よりも賞重く社會上の地位もその上にあつた事は一は其の門地が高かつた故であります。かく前には門閥が重んぜられたと同時に社會上の地位も重んぜられて居りましたが、實力の伴はぬ地位は漸次其の効力を失ふに至るは當然の事で何時か實力優勝の時代があらはれねばなりません。實にこの戰國時代は實力優勝の時代であつて經驗あり實力ある者が下層民間に沈倫して居た爲めに新英雄は下層民間より多く興り自ら下剋上の有様をあらはしたのであります。只かゝる間にあつて足利氏が十五代の長命を保ち得た事は不思議に思はれますが、之は足利氏に實力がなかつたからで若し今少し實力があつたらもつと早く花々しく碎け散つてしまつたか又は戰亂の世を現はさすにすんだかも知れません。

この時代には人々互に競争し自利のみを計り親戚でも主従でも自利のためには劍の下を潜るといふ事を僻けませんでした。世のもつれを一層甚しからしめた慶仁の大亂は勿論當時は戰爭を一々しらべて見ると大抵かかる關係ある者の間に起つたものであります。又素性を洗へば只の油賣の勘九郎であつた者が目をかけてくれた主人の永井永弘を殺し同僚の齋藤氏をたはして齋藤秀龍と名乗り遂には又主人土岐頼藝をも追ひ出した事は實に君臣間の結合力を失うた適例といはねばなりません。又この時代には人生の大事なる結婚も權略的に行はれ悲慘な生涯を送つた婦人も少なくないのであ

三十一